

東建パブリニュース

2020年1月14日

経営管理本部 広報IR室

《このニュースは、当社に関連する記事が掲載された新聞・雑誌等の情報を逐次、速報するものです。》

掲載 2019年12月28日 月刊「武道」 P.6・7

●当社に関する記事の掲載がありましたので、以下の通りご報告いたします。

武士の精華

武具光耀

十三

重要文化財

短刀 銘来国光（名物塩河来国光）

九州国立博物館 望月 規史

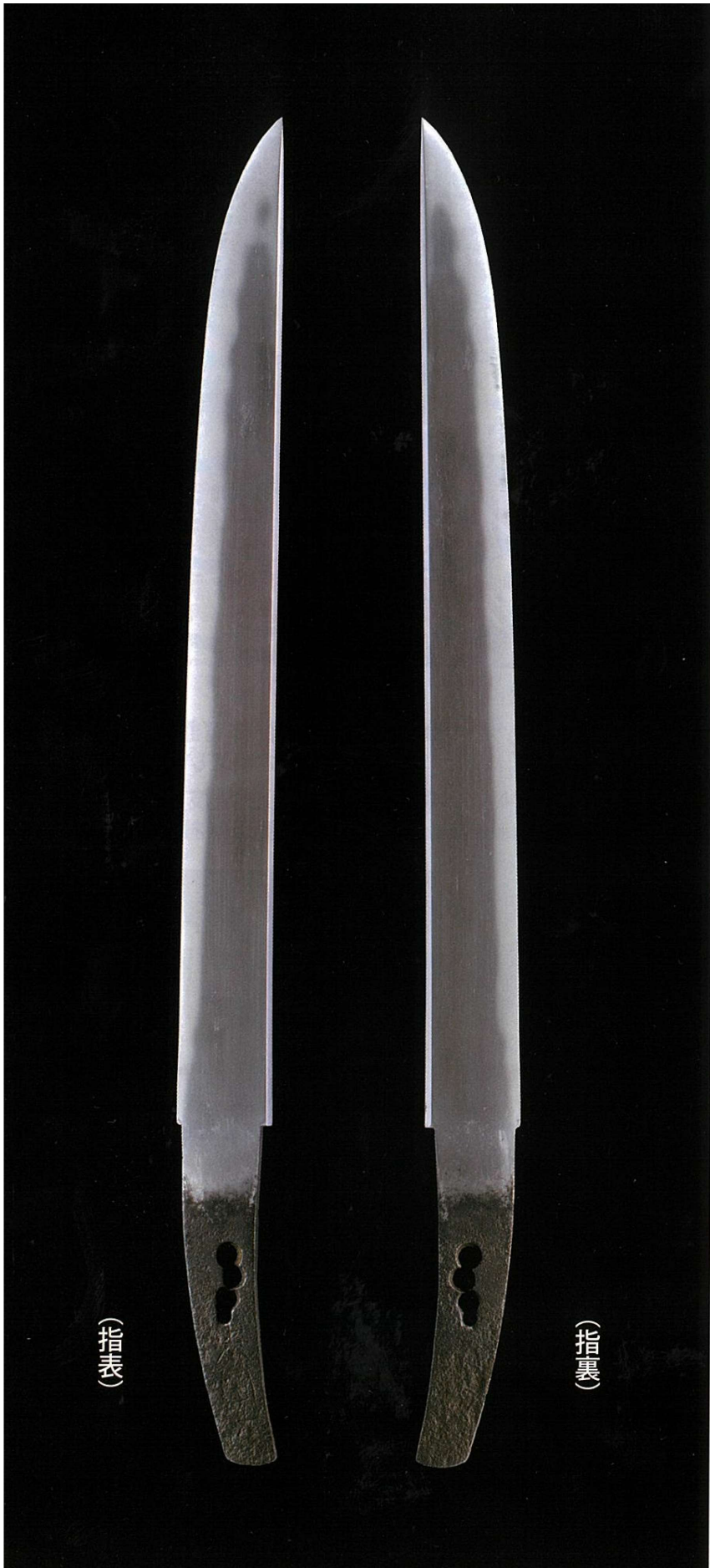
重ねがやや厚い平造、中筋広い三ツ棟、小板目よく約み、地沸厚くつく。刃文は浅い湾れに互の目が交じり、帽子は乱れ込む。匂口明るく冴え、小沸深くよくつき、金筋わずかに入る。茎は生で振袖風となり、鑓目は浅い勝手下がり、目釘孔は4つ連ねた瓢箪形をなす。目釘孔の下に刀工銘「来国光」の三字を刻す。

本品は、山城（京都）を代表する刀工集団・来派のなかでも特に名作揃いで知られる国光の短刀で、同工の太刀と比べ湾れ気味で一段と沸も強く、あたかも相州伝のよきな相貌を示す。もとより国光は端正な直刃のみならず、直刃に小乱を交えるものや、互の目あるいは湾れを大出来に乱れるものなどがあり、その作行の広さは同派随一とされるが、本品はその特徴を余すところなく伝える。更に目を見張るのは帽子で、表は丸い飛び焼きが入る一方、裏は小丸に返りが深く入り、しかも表裏ともに沸が強く、大胆な相貌を示す。

同工による短刀としては、戦国の覇者織田信長の実弟にして茶聖千利休の高弟としても知られる数寄者、織田長益（有楽斎）の所用で、本品と同じく刀剣ワールド財団が所蔵する「国宝 短刀 銘来国光（名物塩河来国光）」も傑作として名高い。

また「塩河来国光」の名は、織田信長の配下で近江国（滋賀県）の豪族あるいは摂津国（大阪府）の国人領主であったとされる塩河氏が所持していたことに由来し、のちに徳川四天王として知られる本多忠勝の子息で三河岡崎藩主の本多美濃守忠政の所用となり、以後岡崎藩に伝来した名物刀剣である。

▽「重要文化財 短刀 銘来国光（名物塩河来国光）」は、令和二年一月一日（祝・水）より九州国立博物館で開催される特集展示「刀剣ことばはじめ―刀剣ワールド財団と九博の名刀―」で展示予定です。



銘 来国光

名称	短刀 銘来国光 (名物塩河来国光)
時代	鎌倉時代 十四世紀
法量	刃長二五・六cm
反なし	反なし
所蔵	愛知・刀剣ワールド財団 (東建コーポレーション株式会社)

(たんとう・めいらいくにみつ) (めいぶつしおかわらいくにみつ)